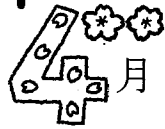


2021年(R3年)



No. 349

# ひとはつうしん

(題名: 中森優一)



社会福祉法人 ひとは福祉会

〒739-1203

広島県安芸高田市向原町長田1857番地

TEL(0826)46-2960 FAX(0826)46-4355

(ホムアド) http://hitoha-fukushi.com (メルアド) honbu@hitoha-fukushi.com

今年の広島の花の開花は、全国で最も早かったです。コロナ禍においても彩鮮やかな春の到来に心が弾みます。進級、進学、就職と年度の狭間、あわただしい日々をお過ごしのことと思います。

約80名の子どもたちが利用している児童支援部から、今年1名の生徒が社会に羽ばたきます。仁伍さんとは、小学3年生の時から早10年の付き合いです。高等部への進学を機に、ひとはほからくらむぼんに利用事業所が変更されましたが、目標としていた学内での検定に真摯に取り組んでいました。

検定をクリアするごとに、安堵の表情の中にも自信が窺えました。くらむぼんでは私たちスタッフの様子にも気を配り、さりげない手伝いぶりに、下級生の子ども達

からも一目置かれる「お姉さん」として、物静かな中にも存在感たっぷりでした。

私たち児童支援部は、ひとはの中で成長著しい幼児期、学童期の活動支援を担っています。子どもたちの成長の道筋はそれぞれですが、去年より今年、小学生の時よりも中学生になつてと、子どもたちの可能性に目を見張るものがあります。

子どもたちの成長を親御さんと共に喜び、分かち合える春を迎えていくように、直向きな実践を重ねてまいりたいと思います。

仁伍さん、初給料で何を買うのかな？  
(児童支援部 佐竹正充)

今年度4月からの題字は、就労センターあっぷの中森優一さんが担当します。中森さんは24歳、好きなアニメは最近のプリキュア。アグリサポートで頑張りたいことは苗箱の回収と納品です。

ひとはの隣で自然栽培農園をされている田中陽可さんを紹介いたします。

## ● 出身地は？

東京の生まれです。過去5年間は群馬県の村に移住し農業を経験。

## ● 農業を始めたきっかけは？

アメリカ在学中病気になり、しばらく何も口にすることができず、飢餓で苦しんでいる人はこのような思いをしているのかと身をもって経験したことが大きなきっかけです。飢餓に苦しむ人を少しでも減らす活動をしたと考え、まずは自分が農業をしようと決めました。

## ● 現在されていることは？

今年はずつまいもを収穫し、それを干し芋にしました。家のすぐ近くにも農業をするために移住された家族がいて、どんどん栄えていくといいなと思います。農業以外に向原でも英語教室をやりたいと思っています。小学生から大学生まで対応可能。自分自身の経験から、世界が広がる経験をしてもらいたい。

## ● ひとはと関わってやってみたいことは？

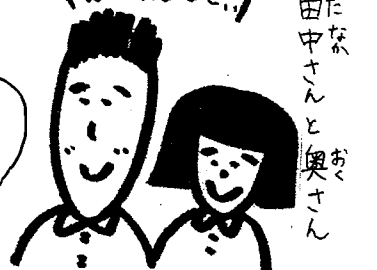
ササキ亭へ野菜の提供、ひとは館でのアイスの材料に使ってもらえると仕事の励みになります。こういうカボチャが欲しい、こんな小松菜やケールを作って！という希望に応えたい。畑作業中、ひとはの人が散歩で通ったときに「か、こいいねー」と声をかけられました。初めてのことで、農業を通じたかかわりや英語を通じた関わりができればいいなと思います。

## Information

LINE @iniabi\_farm

Instagram @iniabi\_farm

収穫体験や、お子さんの土遊びの日も開催予定です。ぜひ遊びに来て下さい！



田中さんと奥さん

# 「エール」

ひ

「石川さんならできる」私が不安を口にしたとき安作さんが言ってくれる言葉です。そのまっすぐな言葉にいつも勇気づけられ、気が付くと思つたよりいい方向に進んでいるように思います。そんな心強い存在の安作さんですが、今、一人暮らしと一般就労を目標に掲げている最中で、宿泊体験や慣れない敬語、相手の目を見て話すなど、苦手なことにも前向きに取り組んでいます。悩み、考え、次に活かそうとする姿は必ず実を結ぶと信じています。安作さんが一歩踏み出す時、『なみさんならできる!』と笑顔で背中を押そうと決めています。

(就労センターあっぱ 井上(石川) 未央)

と

# 「一人ひとり、その人を見る」

は

3月末でひとはを卒業し、新しい職場で働いています。退職前に「障がいのあるなしで、その人の人格が変わるわけではないからね。その人本人をしっかり見る事が大事。それは『自分自身』を見るときも同じ」と寺尾さんに言われました。ひとはでの出会いがあったから、この言葉を少し理解できたように思います。

それでも完全に理解できたと思ひ上がらずに、これからもこの言葉について考えていこうと思います。

(共同ホーム ひとは長屋 柴坂 尚樹)

の

# 「赤かばに挑戦」

日

くらむぼんではスタッフの手作りおやつの日があり、この日は大学芋、ゆでたブロッコリー、赤かばのつけもの。嫌いなものは絶対に食べなかつた悠人くんは「赤かばは苦手だけど食べてみる」と言い、口にした。においが気になるからと鼻をマスクで隠したり、ドレッシングをかけたりして何度か口に入れようとしていたが、結局食べることはできなかった。夏に出たきゅうりのつけものを「これだけなら食べてあげてもいいよ。」と5mm角程度のものを口にすると姿が見られた。「これだけなら食べられた」という小さな成功を積み重ねている。「苦手なことに挑戦している姿、かっこよかったよ。」

(くらむぼん 重原 静香)



夕

# 語り継ぎたいこと

～おーい 聴こえますか 改訂版～

寺尾さんのお話のあとがき  
相談しつづけて  
「ひとり」の物語

ひとはは自分の好きな地域で暮らすためにできた施設であることを伝えると、ようやく安心したのか笑顔になりました。

この頃の重廣さんは機会があると「ぼくはずっとずっと向原で暮らします。」

「近所のおばさん達が働いとる所で働きたいのう。ほいじやが、むつかしいけんのが、在宅で家族以外の人達と付き合う機会がほとんどなかつた重廣さんの願いです。

一人のきららと出発 したひとは福祉会。福祉事務所に勤める友人が激励に駆け付けてくれた時のことです。ひとは第1号の重廣さんに友人を紹介すると、彼は膨れっ面して挨拶もろくにしませんでした。友人が帰った後、重廣さんに「どうしたん？挨拶くらいしてくれろと思つたのに。」と残念そうに伝えると、「寺尾さんはあのおじさんと相談して、わしをどこかの施設に入れようと思つとるんじやろが。」と言つてはありませんか。びつくりしました。以前、施設に入所したことのある重廣さんにとって、福祉事務所の人とは、自分をよその施設に入れようとしている人のようです。

ひとははこれまできららのつづきやきせ、それを支えてきた知恵を冊子にしたものを発行してきました。ひとは開所から35年経ち、読み返すと、変わらない願いが流れています。その願いを、ひとはつうしんの中で「語り継ぎたいこと」として、実名を出しながら掲載していきます。

(編集委員)

「力に任せて良かったです。」 - 編集後記 -  
文尚さんの主治医が、大学病院へ帰られることになり、最後の受診。いつもの血液検査を待つ診察室へ。「先生ありやうございませう」と言う。力に任せて良かったです。ガンが治ったわけではなく、これからの治療も気になるところ。でも先生のその言葉はしみじみと心にひびいた。帰りの車の中で話すと文尚さんも頷いていた。寺尾 順子